

研究紀要第33号

子どもと共に創る生活

← 期にふさわしい生活を求めて →



2000

島根大学教育学部附属幼稚園

はじめに

子どもの成長を促すもの

——同行的保育と半歩前進的保育——

島根大学教育学部附属幼稚園長 山下 政 俊

1、変化する子どもに見る不変性と保育者の構え

子どもの様子が大きく変わった、と指摘されることが多くなった。しかし子どもたちは、そのような指摘にもかかわらず、あまり変わっていないのではないかと、とも思われるのである。なぜそのように思うのかといえば、子どもの遊ぶ姿や動きを見ていると、そこには時代を超えて不変な面、あるいは普遍的な部分があると考えられるからである。彼らはそこに興味や関心のある遊びがあれば、他から強制されなくても自らそれに飛び込んで楽しんでいる。その点において子どもたちは変化している、とは思われないのである。

たしかに子どもを取り巻くこれまでの子育て環境が、

- ① 核家族化・少子化・女性の社会進出
- ② 地域社会における大人相互間や子ども相互間、大人と子ども相互間の人的な繋がりや関わりという共同性の欠如や崩壊

などにより大きく変化し、それに応じて子どもたちも変化してきていることは事実であろう。しかしそのような変化の中にあっても子どもたちは、彼らの普遍的な性質である、遊びへの人間的な衝動をいまま持ち合わせ、その表出・表現の機会や場面をあらゆる所で求めていると考えられるのである。

「子どもたちに生きよう」と提唱したフリードリッヒ・フレーベルが、「キンダーガルテン」を開設してから160年、彼が描き・構想し、具体化を計ったこの「子どもたちの庭園」は、遊びたくてもその時間・空間・仲間が無くなってきた今日の子どもたちにこそ、むしろ必要とされ、用意されねばならない、最も重要な幼児期の生活と成長の環境と思われる。なぜなら彼らは、幼児期の仲間の集まることのできる場・環境となる今日の幼稚園であるキンダーガルテンにおいて、そこで展開する遊びの中で遊びを通して彼らの年齢や発達に相応しい創意や工夫、想像性や独創性、感受性や表現力、関わりや共同性などを発揮できる、と確信するからである。

子どもたちは、適当なあるいは適度な環境があれば、かならずやこの時期の彼らの全存在を投入した生活活動である遊びを行い、自己実現を図るものである。もしそうだとするならば幼稚園と保育者は、今日の子どもの置かれている状況をよく認識しながら、彼らの自己実現をその教育目標の達成に重ねて追求しなければならないだろう。いまそのために保育者に

は、子どもたちへの懐の広い見方と持続性のある構えが求められている。

2、成長を促す遊びへの同行的保育と半歩前進的保育

遊びは、子どもたちにとっては全力活動である。彼らの身体の内から外からのあらゆる力や能力、現在可能な範囲の力量を全て出し切るのが、子どもたちの遊びである。そのような遊びは子どもたちに何をもたらし、彼らの成長をどのように促すのであろうか。これまで筆者が見てきた子どもたちの様々な遊びから想定できることは

- ① 頭脳活動による、遊び方の知識や技能の獲得、遊びに関わる思考力や追求力の発達
- ② 身体の諸部分や全体を利用した活動による、身体的器官や機能の訓練、身体的技能や能力の発達
- ③ 遊びの中での心的な注意や緊張、内的な構えの持続による、集中力や持久力、追求心や探究心の向上
- ④ ひとつの遊びから得られた充実感や満足感、効力感や有能感による、次や他の遊びへの興味・関心の拡大や力量の転移
- ⑤ 遊びを通じた交わりや関わりによる、仲間や友達との間での模倣や伝え合い、モノやコトをめぐるやり取りやコミュニケーションの仕方の習熟と社会性の発達
- ⑥ それらの過程を通して喚起される、感情や情緒の開放や癒し、感性や表現力の発達
- ⑦ このような諸力や諸能力の獲得や発達、意志や構え・意欲や関心の向上、情緒や感性の発達などによる、子どもの人格全体の拡張・豊富化・深化

などの成長を、遊びは子どもたちにもたらすものと思われるのである。

子どもの成長を直接促す要因となるのは、遊びそのものである。他方でその遊びを媒介したり支持したり促進したりするのは、子どもとその遊びの環境や条件となる幼稚園の人的・物的な存在である。その中でもこれから大きな位置と役割を持つてくると考えられるのが、保育者とそのあり方である。子どもは誰も、遊ぶ本能と一定の能力と意欲を持っている、と考えられる。その子どもたちが今日、遊ばない・遊べない・遊びを知らないと言われる中で、保育者にはそのような子どもたちに対する地道で着実な受容と支援としての保育が期待される。それと共に水先案内的で飛躍的な刺激と誘発としての保育も求められる。保育者には常に、遊びを自分で見つけようとする子どもと共に一步一步進むことも、遊びを発見・構成できない子どもの半歩前を進むことも大切なのである。

目 次

子どもと共に創る生活 — 一期にふさわしい生活を求めて —

はじめに

園長 山下 政 俊

研究計画と取り組みの全体概要	1
I 研究主題について	
II 副主題 期にふさわしい生活を求めて (第2年次)	3
1. 副主題設定の理由	
2. 教育課程編成と時期時期の「生活の構想」(指導計画)の基本的な考え方	4
(1) 教育課程の編成における視点	
(2) 「生活の構想」の考え方	5
3. 基本的な保育の姿勢と重視したい経験の内容	7
III 平成12年度の研究の概要	8
1. 副主題「期にふさわしい生活」を求めて (第2年次)	
(1) 平成11年度の研究の成果と課題	
(2) 本年度(平成12年度)捉えた実態	
(3) 本年度の研究について	
2. 研究のねらい	10
3. 研究の仮説	
4. 追求の視点	
平成12年度 研究構想図	11
教育課程	13

保 育 の 実 践	19
各論 1 3歳児いちご組	小早川周子 19
一人ひとりに固有な発達のプロセスを大切にする	
— 3歳児の人とのかかわりと心情面の発達に注視して—	
各論 2 4歳児さくら組	石橋かおり 36
友だちの思いやその子らしさを受けとめあって生活していく姿を支える	
— いろいろな友だちとのかかわりの中で葛藤や歩みよりに着目して—	
各論 3 4歳児たんぼぼ組	野津 道代 52
母子分離不安を解消し、子どもの自立感を促すための人的な環境の構成をめぐる考察	
— 母親の日常的な保育参観・参加・相互理解と子どもへの影響に注目して—	
各論 4 5歳児ほし組	安藤佐智子 80
一人ひとりの個性が響きあう学級集団作りを目指して	
各論 5 5歳児つき組	星野 和美 96
子どもの願いを大切にして	
— 5歳児12期の野菜に関わる生活の中で—	
各論 6 けんかや葛藤の中で育ちあう子どものかかわり	
— 子どもがみつけていく遊びの中で発生するけんかや葛藤の発達における意味を探る—	
..... 講師 岡崎由美子	108
各論 7 保健室における子どもとのかかわりと役割	
— 保育と養護教諭との連携—	
..... 養護教諭 永見智佳子	123
各論 8 家庭・子ども・幼稚園が響きあいながら歩む幼稚園を求めて	
..... 副園長 福田 郁子	128
特 別 寄 稿	
「幼児期の発達課題と必要な経験」を見直す	
— 《シンポジウム》での議論の補足として—	
島根大学教育学部幼児教育研究室 西田忠男先生	132
研究のまとめ—その成果と今後の課題	136
お わ り に	138

3. 子どもと保育者だけではなく、保護者も含めた生活を考えていく。

- ① 母子分離が難しい子どもの場合、周りの子どもたちと自然に共有していけるような「場」を母親と共につくっていくようにし、子どもたちが「共有できる居場所」として母親の存在を生かす。
- ② 保育の場を通してのコミュニケーションによる、母親と保育者の信頼関係の成立と子どもの信頼感・自立感の芽生えには、相互に関連し合うものがあることをふまえて援助していく。
- ③ 「フリートークの会」や「一日保育参観後の少人数による懇談会」など、子どもの成長の喜びや子育てにおける不安・悩みを語り合ったり、他の保護者の経験談を聞きアドバイスを受けたりする場と時間を保障する。

4. 研究の成果

- 実践を通して、(a)、(b)は相互に関連し合いながら育っていくことに着目した。
- 目に見える形だけでなく、一人一人の経験していることを心情・意欲・態度の内面からとらえて支えていくことが大切であることを確認した。
- 保育者同士が他クラスの営みに立ちどまり、気持ちを向けて、同学年や異年齢の子ども同士のかかわりの場面場面を支えていくことによって、一人一人の活動や経験が広がり、生活の内容が豊かになっていくことを確かめた。

5. 今後の課題

- 子どもと共に期にふさわしい生活を創っていくためには様々な人々との連携が重要であることを再認識し、さらに力を注いでいるところである。実際の子どもの姿や援助のあり方を語り合い、多面的に子ども理解をしていくことを通して、教職員同士の連携のあり方を語り合い、共通理解を深めていきたい。
- 保護者との連携については、共に生活を創る仲間として今後も引き続き、より密な連携のあり方を探していきたい。

お わ り に

思いがけない3月の大雪にびっくりしましたが、子どもたちの植えたチューリップや菜の花が花をつけ始め2001年の春がやってきました。

子どもたちも、一人一人がこの一年間で育んできた力を表出し、成長したすばらしい姿をみせてくれています。

今年度もまた、子どもたちの実態と保護者の願いをしっかりと受けとめ理解することから研究はスタートしました。その中で、今、生きる力として何が大切でありどのような経験を積み重ねていくことができる生活を創っていくのかなど、みんなで考えながら一步一步あゆんできました。

年長組さんと年中組さんがいっしょになってだんごレースをやったりこままわしや跳び箱に挑戦したりする姿や年長組さんのつくったおぼけやしきや大きな家、いろいろなお店に入れてもらい、いっしょに遊んで大喜びしている年中組さんや年少組さんなど、異年齢で関わりながら幼稚園で生活する姿が随所に見られたのは、私たちが研究として取り組んできたことへの手応えでもあり、たいへんうれしいことでした。

また、家庭と幼稚園とが響き合いながら歩いていく連携のあり方を求めるなかで行なうことができた秋祭りは、子どもたちにとって心はずむできごととして印象深く残ったことでしょう。

とはいえ、まだまだ課題も多くあり、これからの積み上げが求められるところです。

これまで、研究を推進して行くにあたり、ご指導ご助言賜りました松江市教育委員会を始め松江市立幼稚園、島根大学教育学部、附属小学校のたくさんの先生方に厚くお礼申し上げますと共に、たいへんお忙しい中、ご寄稿いただきました島根大学教育学部の先生の温かいご支援に対し深く感謝申し上げます。

今後の研究に向けて皆様方のご批判ご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

副園長 福 田 郁 子

島根大学教育学部附属幼稚園研究同人

園 長 山 下 政 俊

副園長 福 田 郁 子

教 諭 野 津 道 代

星 野 和 美

石 橋 かおり

安 藤 佐智子

小早川 周 子

養護教諭 永 見 智佳子

非常勤講師 岡 崎 由美子

島根大学教育学部

附属幼稚園研究紀要第33号

発行日 平成13年3月31日

発行者 島根大学教育学部附属幼稚園

松江市大輪町416-4

TEL (0852) 29-1120